

I 研究への構え

1 学級から学校へ

昭和37年附属小学校に特殊学級が一学級設置されて以来、昭和39年には附属中学校にも特殊学級が設置され、学年進行とともに昭和44年、小学校に3学級、中学校に3学級、計6学級が附属小・中学校に設置されることになった。これら6学級の児童生徒が母胎となって、昭和53年4月、奇しくも特殊教育100年の記念すべき年に附属養護学校が誕生したのである。

附属小・中学校から独立したとはいえ、現在の小学部には16年、中学部には14年の、それぞれの教育の実践とすぐれた研究の実績はある。しかし、それらは、いずれも相互に特殊学級としての密接な関連のもとに進められたものでなく、いわばそれぞれの附属小・中学校の研究テーマにそった形で行われた研究であった。

また、小学部では、おおよそ特殊学級が設置されてからの昭和40年代になって、将来の養護学校の新設を予想して児童の入学入級について配慮され、中度障害の子どもや重複障害の子どもたちを入学させていた。ところが中学部の生徒については、入学希望者の障害程度が比較的軽度の生徒が多かった。従って、おのづから教育方法や指導内容についても、小・中学部ではやや取り扱う上で相異のあったことも事実である。

率直に言えば、養護学校への就学の対象児としての中度の児童生徒は、小学部に多く中学部（昭和53年度の中学部卒業生のうち、高等部進学が半数、他の半数は就職）には少ない傾向にあった。しかし、この子ども達も年々進級、進学していくものである。小学部の子どもたちが高等部へ進学する時点における本校児童、生徒の姿を頭にえがいて考えるならば、当然教育の方法、指導内容それに研究課題などについて考えていかなければならないことになる。ここにおいて、われわれは精薄児教育の本源をみつめながら、それぞれの16年なり14年の足どりを尊重しながら、過去を振り返り、将来を見通して教育の方向づけを見直す必要が痛感されてきた。

学級から学校へ、看板が改まったからといって、何事も変わるわけではない。流れを変えることはできても、底に生きつづく教育という堆積の息吹きを徐々に入れ替えていかなければ、一挙の改変では教育の断層や戸惑いが生ずるであろう。そこで、各学部の従前の伝統的な教育方法を尊重しながら重複をさけ、精選しながら、更に高等部へ積みあげるという一貫方式に立って、小・中・高の調和を図ろうとするのが昨年度からの目標であり狙いである。換言すると、（幼）小・中・高等部の教育の一貫性を考え、統一をもった学校としての基礎づくりをするためにも、また研究を進めるためにも調和と統一をもって進めることにした。